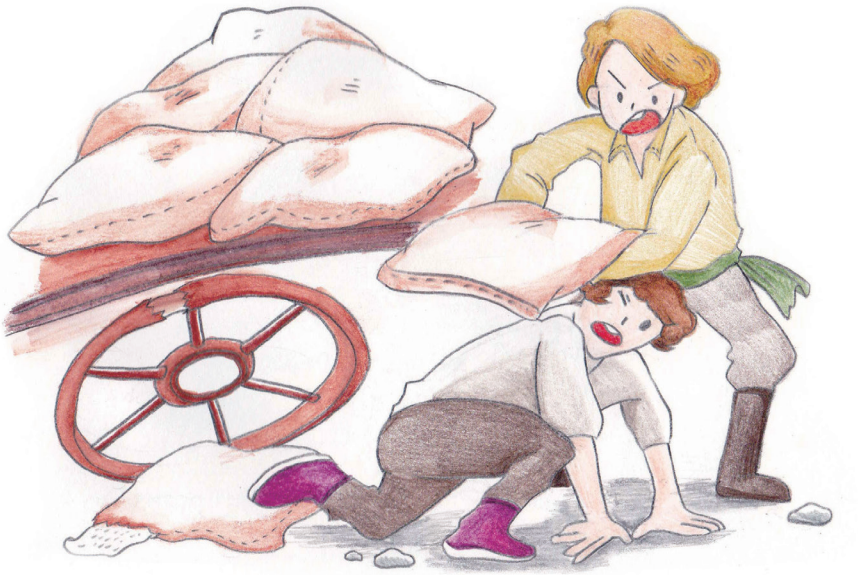
番ぺいハロビッツ

「ハロビッツくん。
ざんねんだが、きみには、わがホルスト城の番ぺいをやめてもらう。」
ハロビッツは、ある夜、たい長によび出されて、きゅうにこうつげられた。
番ぺいとは、お城の門のけいびをせんもんにするへいしのことだ。
「ハロビッツくん。きみのがっしりとした体つき、うでの力、やりのかまえ方、どれもたいへんすばらしい。だが、きみは人をうたがうことをしない。人にあますぎる。そこなんだよ。『番ぺいは人を見たらみんなわるものだと思え！』って、何どもちゅういしたじゃないか。きみでは、だめなんだ。」
ハロビッツはハンマーで頭をガーンとたたかれたような気がした。ゆめだったお城の番ぺいにやっとなれたのに。きびしいくんれんにだってたえてきたのに……なぜ？。
たしかに、道行く人からたのまれると、いやと言えず、つい言うことをきいてしまう。心やさしく力もち。ちょっとばかり気がよわいけれど……。そんなあいすべき番ぺいハロビッツのことを、たい長はどうしても気に入らないのだ。
次の日、ハロビッツはお城をあとにした。あてもなく、道をとぼとぼと歩いた。

（ぼくはどうすればいいんだろう……。）
ハロビッツは心の中でなんどもつぶやき、足もとばかりを見ながら歩きつづけた。
お日さまが山のてっぺんにかかり、あたりが赤くなりはじめたころ、ハロビッツはある村のこなやの店の前をとおりすぎようとしていた。
バリバリ、ドスン！
「いたたたっ！たすけてくれえ！」
大きな音とさけび声がした。
ハロビッツはハッとして声のほうにかけつけた。すると、にぐるまの車りんがはずれ、大きなこなのふくろが、こなやの上にのしかかっていた。
ハロビッツはすぐさま、こなのふくろをひょいとりのぞいてやった。
「いやあ、おかげでたすかったよ。パンやにとどけるこなをにぐるまにのせていたら、このありさまだ。ところで、おまえさんは、いったいどこのだれだい？」
ハロビッツは、自分はだれで、こうしているわけは、これこれしかじかと話した。
さいしょ、こなやはハロビッツの話をきのどくそうに聞いていたが、



なにかきゅうに思いついたのか、ハロビッツにこう言った。
「たすけてもらったついでといっちゃなんだが、パンやにこのこなを
はこんでくれないかね？日がくれるまでとパンやにはたのまれているんだが、
このにぐるまじゃ……。」
「そんなの、おやすいごようだよ。」
ハロビッツは大きなこなのふくろをひょいとかついだ。そして、こなやのあとをついて行った。
パンやへむかうと中、こなやは立ち止まり、ハロビッツのほうをふりむいて話した。
「この村のパンやのじいさんは、わかいはたらき手をさがしている。
行くところがないんだったら、どうだね、パンやの手つだいをしてみないか？
おれがたのんでやるから。」
「ぼくにパンやのしごとができるのか？」
ハロビッツはびっくりし、そしてまよった。番ぺいのことしか頭になかったからだ。
「おまえさんの、その力があればきっとできるさ。それに……。」
こなやのねっ心なすすめで、ハロビッツは、まずはやってみるかと思った。
パンやにつくと、こなやがハロビッツはいいやつだと話してくれたおかげで、パンやは
ハロビッツをこころよくむかえ入れた。
パンやの朝は早く、まだくらいうちからうごきだす。
「ハロビッツや、こなを一ふくろもってきておくれ。それからいどに行って　おけいっぱい

水をくんでくるのじゃ。それがすんだら、まきをわって、かまどに火を入れて……」

「はい、おやかた！」

ハロビッツにとって、パンやのしごとはどれもはじめてで、なれないことばかりだった。

それでも、ハロビッツは言われるとおりに、ただただいっしょうけんめいはたらいた。

「ハロビッツや、パンづくりには、いいこなをえらぶこと、そして　よくこねることが大じじゃ。

おまえさんがいくら力もちでも、力だけではうまい

パンはつくれない。」

「はい、おやかた！」

ハロビッツは力のかげんをくふうし、見てはこね、

見てはこねをなんどもくりかえした。

「ハロビッツや、パンをやく火かげんは、

パンの大きさやしゅるいでちがう。

やき上がるころ、ぱりぱりと音がするから、

このかすかな音を聞きのがさないことじゃよ。」

「はい、おやかた！」

ハロビッツは、あせいっぱいになりながら、

かまどの火をじっと見つめつづけた。

パンづくりのしゅぎょうもすすみ、ハロビッツの

パンが店にならぶようになった。やがて、ハロビッツのパンはよいかおりがしてうまい！という
ひょうばんがたち、店はたくさんのおきゃくさんではんじょうするようになった。
ハロビッツは、おきゃくさんのよろこぶかおを見ているうちに、今までになく、しあわせな自分
に気がついた。もっとしゅぎょうをかさね、パンづくりの名人になろうと、このときハロビッツは
けっ心したのだった。

（和井内　良樹　作）

番ぺいハロビッツ
（中学年 1-(5)）

(1) ねらい
自分の特徴に気づき、よいところを伸ばそうとする心情を育てる。

(2) 資料の特質
番兵を解雇されて自分に自信を失いながらも新たな自分の可能性を求めて活躍する主人公ハロビッツの姿がえがかれている。途中、パン屋の仕事を手伝う場面では、周囲からのアドバイスをきっかけとして自分のよさに気づき、パン作りに一生懸命励もうとするハロビッツの心情に十分共感させるようにしながら、ねらいに迫りたい。

(3) 展開例
1　自分の特徴について発表し合う。
2　資料「番兵ハロビッツ」を読んで話し合う。
①辞めてもらうと言われハロビッツはどんな気持ちか。
・自分はだめな人間なんだ。
②パン屋の手伝いをしてハロビッツはどんなことを考えたか。
・自分に向いているかもしれないな。
・番兵のことはあきらめて他でがんばろう。
③ハロビッツがパン作りの名人になろうと決心したのはなぜか。
・自分のよいところが出せるから。
3　自分のよいところについて考える。
4　教師の話を聞く。
○教師の体験談として「人はだれにでもよいところが必ずある」という内容を話してまとめる。

(4) 指導上の留意点及び工夫
展開例２の②では人からのアドバイスで、自分の特徴に目を向けていくハロビッツの心の動きに気づかせ、自分のよいところを前向きに生かそうとする心情を追求させるようにしたい。
展開例３では、展開例１で想起した自分の特徴をもとに考えるようにする。グループでアドバイスし合う活動を行い、記述に加筆するように促す。

〔本文イラストは酒井桃華による〕